

庶路川筋のアイヌ語地名

第9回

○シヨンピナイ

「庶路」が「ソ・オロ・ル（滝に向かっている道）」であるところ、庶路川は30キロメートルほどさかのぼると「大滝」と呼ばれる滝になっています。そして、その少し手前には、切り立った崖から流れ落ちる「不動滝」があります。「シヨンピナイ」は、「大滝」や「不動滝」がある沢のことで「ソ（滝）・ウン（…にある）・ピ（細い）・ナイ（沢）」という意味から「滝のある細く深い谷川」と訳しています。

■「大滝」と「不動滝」

「大滝」は、松浦武四郎が著した『東蝦夷日誌』に「ホロソウ大瀧、此瀧幅二丈、高五六丈も有水勢筆に盡し難し」とあるとおり、アイヌ語の「ポロソ（大きい・滝）」の和訳であることがわかります。

一方「不動滝」の由来には、次のような話があります。

明治44年（1911年）、大滝の上流に21戸が入植し居を構えました（滝ノ上集落）。集落の長が石に不動明王を彫刻して大滝に面した場所に安置すると、大滝は「不動滝」と呼ばれるようになり、現在の不動滝は「仙遊滝」と呼ばれました。

ある年、大水で不動明王が流されたとき、それを拾い上げた集落の長は仙遊滝の下に安置したので、それ以降仙遊滝が「不動滝」と呼ばれるようになり、現在の名前になったということです。

【参考】『白糠の文化財』第一集「庶路の滝：不動の滝と大滝」・『蝦夷日誌』上「東蝦夷日誌」

○タツタマップ

「タツタマップ」は、庶路ダム湖に南西から流れ込んでいる川で

す。「タツ（カバの皮）・タ（切る）・オマ（そこにある）・プ（ところ）」という意味で、カバノキの樹皮をはぎとる場所を示しています。

北海道に自生するカバノキは、シラカンバ、ダケカンバ、ウダイカンバがよく知られていて、かつてアイヌの人たちはその樹皮を松明（たいまつ）などの灯火用に用いました。

■松明を使ったサケ漁

知里真志保博士は、アイヌの人たちが行っていた松明を使ったサケ漁について、次のように紹介しています。

カバノキの皮を短冊形に切って5、6枚重ねて縛った「スネ」に

火をつけ、1人がそれで水面を照らし、その左右にヤスマまたはマレク（回転鉞）を持った人がいて、水中に動くサケを突き上げるのである。

スネを持つ人によって、サケが多く寄って来たり、少しも姿を見せなかつたりする。気性の荒い人が持つと、サケはきわめて活発に動いて突きにくい。気性の穏やかな人が持つと、サケの動作が急にのろろと鈍くなる。そういう人を「チエプ・コ・モイレ・プ（魚が・その人に対して・のろくなる・者）」と称する。概して男よりも女や子供の方がチエプコモイレプである。

【参考・引用】『知里真志保著作集3』「アイヌの鮭漁」

